14世紀ピサの内陸運送に関する若干の史料

清　水　廣一郎

本稿で紹介する史料は，1329年から約30年にわたってピサで活動した公証人アンドレア・ディ・プーポ・ダ・ペッチョリの登記簿の一つから選んだものである。かれの登記簿は，ピサとフィレンツェの文書館に6冊，合計1千フォリオにのぼる膨大なものが残っており，14世紀ピサの社会経済史にとってきわめて重要な史料であるが，これまでまったく検討の対象となったことがない(1)。

公証人としてのアンドレア・ディ・プーポの活動は，だいたい1350年を境として二つに分けられる。前半はアルノ川の左岸，ポンテ・ディ・メッツォにほど近いサンタ・クリスティーナ教会の周辺で記録されたものであり，後半は右岸の都市中心部，現在のピアッツァ・ディ・カヴァリエーリの周辺で記録されている。このうち前半部分が商人や手工業者の活動に関する多数の契約を含むユニークなものであって，土地売買，貸付，嫁資契約などが大部分を占める後半部分に対してはっきりとしたコントラストを示している。私は，現在，この登記簿を全面的に分析する作業に従事しているが，それによってとくに14世紀前半のピサの社会経済的環境について，従来とはことなった見解を提示することができると考えている。

さて，この登記簿の前半部分がユニークであるのは，これがサンタ・クリスティーナ教会の周辺で記録されたためであり，さらにアンドレア・ディ・プーポが有力な公証人ダヴィーノ・ディ・ジョヴァンニ・ディ・モッチャの協力者として活動していたためである。

アルノ川の左岸は，中世ではキンツィカ Chinzica，Kinzica と呼ばれていた。このエキゾ

（1）Andrea di Pupo da Peccioli の登記名簿を年代順にあげれば，次の通りである。

1. ASF (Archivio di Stato di Firenze), Notarile Antecosimiano, A. 437.（1329年～1340年，380フォリオ）
2. ASF. Not. Ant. A. 373.（1341年～1342年，50フォリオ）
3. ASP (Archivio di Stato di Pisa), Opera del Duomo, 1279.（1342年～1351年，300フォリオ）
4. ASP. Opera del Duomo, 1280.（1353年～1355年，50フォリオ）
5. ASF. Not. Ant. A. 438.（1357年～1361年，151フォリオ）
6. ASF. Not. Ant. A. 439.（1361年～1362年，38フォリオ）

これらが，なぜこのような形でばらばらに所蔵されるようになったかは分からない。この史料に触れている唯一の文献は M. Tangheroni, *Politica, commercio, agricoltura a Pisa nel Trecento*, Pisa 1973. であるが，いくつかの契約を引用しているだけで，この史料のユニークな性格については言及していない。

チックな名称については従来からさまざまな議論があり，アラビア語起源であると主張されたこともあるが，現在では河川敷を示すランゴバルド語系の語幹 Quint に由来するという説が有力のようである[2]。キンツイカの名称は 11 世紀初頭の史料に初出するが，これはまさにサンタ・クリスティーナ教会周辺の新定住地を意味していた。ピサの都市中心部は，ローマ時代以来，アルノ川の右岸にあり，中世になってからポンテ・ディ・メッツォ（史料上の Pons vetus）を渡った対岸に人びとが定住するようになった。おそらくは，かつての川床の荒地であったのだろう。本来はピサとは別個のヴィラないしブルグスと考えられていたキンツィカも，12 世紀中葉の新市壁の築造によって，ピサの市域内に囲い込まれることになった。しかし，新定住地としてのキンツィカの性格はその後も維持されており，14 世紀においても，この地域は商人，手工業者，それに外国商人や移住者などの集まる活気に満ちた「都市の周縁部」だったのである。

この地域の中心が 11 世紀にさかのぼる古い教会サンタ・クリスティーナである。古い教会の例にもれず，この教会も東向きに建てられているが（オリエンテーション），その側面は僅かな空地を残してアルノ川沿いの道路に面している（現在では教会に接してサグレスティーアが建てられている）。1333 年 10 月，この教会の司祭は公証人ダヴィーノ・ディ・ジョヴァンニ・ディ・モッチャに鐘楼の下の店 apotheca sub balatorio campanilis et sub campanili ecclesie Sancte Cristine を賃貸した[3]。この店は，かつてダヴィーノ自身が教会の壁からアルノ川沿いの道にいたるまでを壁で囲い込んだものであるとしてあるので，おそらくは教会の壁面に接して差掛け小屋のような形で建てられていたものであろう。これがダヴィーノの「公証人事務所」なのである。賃貸期間は 5 年，家賃は 年間 3 リラ 10 ソルドであった。文面からしてダヴィーノは以前からこの事務所を賃借していたのであろう。この契約は 1339 年 7 月に更新され，さらに 5 年間の賃貸が約束されている[4]。

この事務所は道をへだててアルノ川にのぞんでいるだけでなく，19 世紀中葉まで存在した舟着き場の前に位置している。つまり，港の「公証人事務所」だったのである。ここで取上げる史料を残した公証人アンドレア・ディ・プーポも，ダヴィーノの協力者の一人として活動しており，その契約の多くがこの事務所で締結され，登記されている。その結果，かれの登記簿には，他の多くの登記簿とはちがって，ピサの商業や海上活動，多数の外国人の存在を反映することになった。ダヴィーノ自身やその他の協力者の登記簿がすべて失われてしまった現在，アンドレア・ディ・プーポの登記簿は，他に類のない貴重な史料的価値を有しているのである。ジェノヴァ，サルデーニャ，シチリア，あるいは北アフリカとの関係を示す一連の契約は，その中でも重要なものであるが，この問題は別稿でより詳しく検討することとして，ここでは，ピサ・フィレンツェを中心とする内陸交通に関係するいくつかの証書

（2） F. Leverotti, Il quartiere medievale d'Oltrarno: Chinzica, G. Rossetti et al., *Un palazzo, Una città,* Pisa 1980, pp. 39-61.

（3） ASF. Not. Ant. A. 437, 43-43v.

（4） ibid., 338v.

を紹介し，ピサのアルノ川沿いの一区画であるキンツィカが海上および内陸交通の重要な結節点であることを示し，「都市の周縁部」の持つ広がりについて考えるための一助としたい[5]。なお，以下はごく簡単な要旨の紹介であり，翻訳ではない。

史料Ⅰ（1337年9月29日）[6]

フィレンツェ領域のモンテルーポ出身の運送業者 vecturarius アレッシオは，同じくバルベリーノ出身の運送業者メーオに，らば1頭をそのあらゆる欠陥，病気と共に売却した。買い手であるメーオはこのらばの欠陥を承知しており，今後，なんらの異議の申し立てをしないことを約束した。また，アレッシオは代価30金フィオリーノを受領し，この件についてメーオに，今後，なんら請求しないことを約束した。いずれも，違反した場合は2倍の罰金を支払う。通常裁判官にして公証人たるアンドレア・ディ・プーポは，これがフィレンツェおよびその他の都市法における guarentigia（違反した場合にただちに強制執行できる条項）にかなっていることを認め，この証書の順守を命じた。キンツィカのサン・セバスティアーノ教会にて。証人＝サンタ・クリスティーナ教区の宿屋の主人1名，フィレンツェ領域の出身者1名。

史料Ⅱ（同日）

前述の運送業者バルベリーノ出身のメーオは，同じくモンテルーポ出身のアレッシオに，らば1頭をそのあらゆる欠陥，病気と共に売却した。アレッシオはこのらばの欠陥を承知しており，今後，なんらの異議の申し立てをしないことを約束した。また，メーオは，アレッシオ（原文では誤ってメーオとしている）にこのらばに関するあらゆる権利を譲渡し，その結果，代価45金フィオリーノを請求する権利を有する。メーオはそのうち30金フィオリーノを受領し，これについては，今後，アレッシオに請求しないことを約束した。残額の15金フィオリーノについて，アレッシオは，1カ月後に支払うことを約束した。違反した場合には代価の2倍の罰金ならびに諸費用を支払う。また，この期限経過後は，メーオはアレッシオの身柄の拘束などを行う権利を有する。通常裁判官にして公証人たるアンドレア・ディ・プーポは，これがフィレンツェおよびその他の都市法における guarentigia にかなっていることを認め，購入者たるアレッシオに（この証書の順守を）命じた。またメーオは，アレッシオに対してこのらばの所有権などを尊重し，侵害しないことを約束した。違反した場合は，

（5）　交通・通信手段が商業活動において占める重要性については，斉藤寛海氏が本格的な研究に着手している。「中世後期の商業郵便 ― イタリアを中心とする考察 ―」『イタリア学会誌』34号（1985年3月）を参照。イタリアにおける基本文献としては，F. Melis, I trasporti e le comunicazioni nel Medioevo, Firenze 1985. があげられる。なお，史料の解釈について，星野秀利氏（ボローニャ大学）から多くの教示を受けたことを付記する。

（6）　年代の表記はもとの史料では3月25日を1年の初めとする Anno di Incarnatione である。ピサで用いられた stile pisano（南フランスにも広く普及した）は，1月1日から3月24日までが現行暦に一致し，3月25日以降は1年先に進むものである。同じ Anno di Incarnatione でも，3月25日から12月31日までが現行暦に一致する stile fiorentino とは完全に1年のずれが生ずることになるので，注意が必要である。

上記代価の2倍の罰金を支払う。通常裁判官にして公証人たるアンドレア・ディ・プーポは……云々。場所，証人は史料Ⅰと同じ。

（すぐ続いて，残額15金フィオリーノが支払われた際の追加記入がある）

前述の売却者メーオの命により，前述の残額15金フィオリーノに関する（証書の）部分を破棄した。ピサ，サンタ・クリスティーナ教会の鐘楼の店にて。証人＝同教会の聖職者1名，前述の宿屋の主人1名。1337年12月5日。

（以上2つのらばの売買契約が偽装された貸付契約であることは疑いない。2つの契約は同じ日に締結され，売却者と購入者がそれぞれ入れかわっている。ただし，らばは同一のものではなく，毛色の描写がことなっており，別々の売買契約という形をとっている。驚くべきなのはその価格である。一方が30金フィオリーノ，他方が45金フィオリーノというのは，それぞれ一寸した商売の資本になり得るかなりの金額である。同じ登記簿の中にある飼育契約を見ても，馬ですら数フィオリーノに評価されているのであるから，これが現実とかけはなれた金額であることは確かである。両者の差額15金フィオリーノが1カ月後に決済されることになっているのを見ると，これが実際上の貸付契約であることは明らかであると言ってよいだろう。それでは，なぜこのような複雑な形式をとるのであろうか。一般の貸付のように，なぜ mutuo gratis と表現しないのだろうか。現在，すぐにこの問いに答えることはできないが，これが運送業者間の古い慣習に立脚したものであることは十分に想像できる。この場合のように，二つの契約が結びついた形で同日に締結されるという例は他に知らないが，らばやろばを欠陥や病気と共に売却する，という契約は同じ登記簿の中にいくつも見出される。これらがここで取上げた契約と同じように貸付であるか，単純な売買であるのかは分からないが，広く普及した慣習の存在を暗示している。家畜を売買するときの特殊な慣習が貸付にまで利用されていると考えてよいのではなかろうか。なお，フィレンツェの都市法に触れている部分も，外国人相互の契約であることを考えると，都市法の適用範囲について興味深い問題を示している。）

史料Ⅲ（1338年6月3日）

ピサ，サンタ・クリスティーナ教区のロレンソ，別名トーソは，私，公証人アンドレアに対して以下のごとく言明した。かれの住居のうまやで死亡した駄馬は，フィレンツェのポンテ・ヴェッキオ近くに住むロレンツォ・ソラーリのものであり，鞍の下の傷がもとで，本日，死亡した。これは嘘でなく，真実である。同教区のマリスカルコ（獣医・蹄鉄工）であるグイダレッロが13日来その治療にあたってきた。前述のうまやにて。証人＝同教区のピエロ・ディ・カンティおよびデーノ・ティーニャ。

同日，同所。同教区のマリスカルコ，グイダレッロとブラーシオは，前述のロレンソの依頼により，また公証人アンドレアの質問に答えて，福音書に手を触れつつ，次のごとくに誓約した。同グイダレッロは，13日来，鞍の下に傷があるこの駄馬を見てきた。そして，毎日，

治療にあたってきたが，本日，この傷がもとで死亡したのを見た。ブラーシオはこの馬が今日生きており，この傷で苦しんでいるのを見たが，現在では死亡していること，この馬が前述の傷がもとで本日死亡したと多くの人が言っていることを聞いた……云々。

（この証書は，駄馬の死亡証明書である。当時は家畜の飼育契約が広く普及していた。これは，一方が他方に家畜を預け，一定期間（多く1年）後の価値の増大分ないし減少分を両者で均等に分割するものである。駄馬やらばの場合には，その間の使用料（一般に麦が多い）を支払うことが多い。家畜が死亡した場合には所有者の負担となる。この場合の駄馬もおそらくはこの様な契約に従って使用されていたのであろう。それ故に，馬が死亡したことを明確にする必要が存在したのである。注目されるのは，証明を依頼した者がピサのサンタ・クリスティーナ教区の住民であり，駄馬の所有者がフィレンツェの住民だったことである。これは，ピサ・フィレンツェ間の恒常的な運送業者のネットワークの存在を暗示していると言って差支えないであろう。なお，証人の一人ピエロ・ディ・カンティは，この地区で営業していた有力な宿屋の主人である。）

史料Ⅳ（1339年4月23日）

フィレンツェのジェリオ・ゴンディの代理人であるサンドロ・ドラゴネッティは，私，公証人アンドレアの面前で，福音書に手を触れて次のように誓約した。サンドロおよびジェリオはフィレンツェ市民であり，フィレンツェにおいて物的および人的負担を行っている。また，チッタ・ディ・カステッロの運送業者アンジェルッチョが，家畜にのせて，本日，ピサからボルゴ・サン・セポルクロに向った6サルマ（らば6頭分の荷物）の洗浄ずみ羊毛は，前述のジュリオ・ゴンディのものであって，他の人のものではない。ピサ，同所（サンタ・クリスティーナ教会の鐘楼の店にて），証人＝エンリーコ・シスモンディ，サンタ・クリスティーナ教区の宿屋の主人1名，同日。

（この証書はとくに説明を必要としない。ただ，ボルゴ・サン・セポルクロのような内陸の小都市の毛織物工業のために，フィレンツェ商人の手でピサから原毛が供給されていることは，これが1339年という早い時期のものであるだけに興味深い。この原毛の産地はわからないが，この時期には，とくにジェノヴァ船によって北アフリカ（チュニジア，アルジェリア）やマジョルカからピサに羊毛が運ばれていた。これについては別稿にゆずることにする。なお，証人の1人シスモンディは，同教区の有力商人である。）

史料Ⅴ（1339年4月3日）

サンタ・クリスティーナ教区のバルタロ・ディ・ラーポは，フィレンツェのアゴスティーノ・ドナーティに以下のごとく約束した。アゴスティーノが，ゲーロ・ダ・チェザーノ所有，船頭ベルグッチョ・ディ・ローニの平底舟 piatta にのせて，アルノ川をフィレンツェ領域

のシーニャ港まで運ばせる「はしばみの実」について，雨以外の水に濡れることのないようにさせること。雨以外の水によって生ずる価値の低下または損害については，その全額を補償する。違反した場合は，輸送品の２倍の罰金ならびに諸費用を支払う。ピサ，サンタ・クリスティーナ教会の鐘楼の店にて，証人＝フィレンツェ出身のフィリッポ・ディ・ジョヴァンニ，シモーネ・ディ・ニコロ・ディ・ポッジョ。

（この証書は，これまでのものとは違って，アルノの河川交通に関するものである。バルタロ・ディ・ラーポについては詳かにしないが，河川交通の元締めでもあったのだろうか。内容的には一種の輸送保険といってもよいような性格を示している。しかし，本来の保険証書のように商品価格，保険期間，保険料などが明示されていないだけでなく，当時の「海上保険」のように貸付契約の形態もとっていない。したがって本来の保険と呼ぶことはできないであろうが，保険類似の慣行が河川交通においてもすでに存在したことは確かである。なお，証人の１人，シモーネ・ディ・ニコロ・ディ・ポッジョは，ダヴィーノ・ディ・ジョヴァンニ・ディ・モッチャの協力者の１人で公証人であった。つまり，この登記簿を作成したアンドレア・ディ・プーポの同僚だったのである。契約には最低２人の証人が必要であるが，登記簿を通覧してみると，証人の１人が公証人である場合が非常に多い。ダヴィーノの「公証人事務所」には，息子のジョヴァンニやアンドレア・ディ・プーポを含めて，つねに３，４人の公証人がいたらしい。証人が２人とも公証人である場合すら存在する。つまり，２人の証人を帯同してこなくても，当事者だけで簡単に登記ができたのである。港の「公証人事務所」として，きわめて便利な機構をそなえていたといえるであろう。）

DOCUMENTI

I. (ASF., Not. Ant., A. 437, 245v. – 246v.)

245v. Alesius, vecturarius, filius Vannis de Montelupo districtus Florentie vendidit et tradidit Meo, vecturario, filio quondam Fortis de Barberino districtus Florentie mulum
246 unum pili nigri vel / quasi boccardum cum omni iure, actione, ratione, proprietate suis et cum omnibus et singulis soprossis, giardis, schinellis, morbis, macaneis et vitiis latentibus et manifestis, quos ipse mulus in se et super se habet vel habere posset, quos morbos, macaneas et vitia idem Alesius asservit in ipso mulo esse, dicens et protestans se ratione vel occasione ipsorum morborum et vitiorum sive aliorum quorumcumque latentium vel apparentium ipsi emptori in aliquo de cetero nolle teneri; quem mulum idem Meus interrogatus a suprascripto Alesio confessus est in veritate se accepisse et habuisse ab eo cum omnibus et singulis morbis, macaneis et vitiis quos habet inter et extra, tam oculitis quam apparentibus et pro tali qualis est, dicens, asserens et protestans se scire dictum mulum sic esse morbosum, macaneatum atque vitiosum et ipsam venditionem nolle sibi teneri occasione dictorum vitiorum seu morborum latentium vel apparentium, faciens ei finem et refutationem et pactum de uterius non petendo de omni iure et actione quod vel quam

habet vel habere posset contra ipsum venditorem occasione ipsorum vitiorum seu morborum, renuntiando exceptione habiti nec accepti, quam exceptionem seu legem redhibitoriam, volens rem reddere et pretium sibi reddi, nec quanto minoris, petens aliquam partem pretii sibi reddi quam non dedisset si scivisset rem vitiosam.

Dictus Meus per stipulationem solennem convenit et promisit dicto Alesio non opponere etc. ad infrascriptam penam; insuper dictus Alesius vendidit et quasi tradidit etc. suprascripto Meo omnia iura et nomina omnesque actiones et rationes tam utiles quam directas, reales, personales et mixtas et omnes alias que et quas ipse Alesius habet et ei vel alteri persone pro eo aliquo modo vel iure seu occasione vel causa sive facto pertinent et competunt et pertinere et copetere possunt in suprascripto et pro suprascripto mulo superius vendito et eius proprietate et eius possessione et eius occasione et causa, ut hiis omnibus et singulis dictus Meus et eius heredes et cui etc. inde possint agere, experiri et excipere et se et dictum mulum superius venditum tueri contra suprascriptum Alesium et eius heredes et bona et contra omnem aliam personam et locum pro pretio florenorum triginta de auro bonorum et iusti ponderis; quos florenos triginta de auro dicti pretii dictus Alesius, interrogatus a suprascripto Meo, confessus est in veritate se accepisse et apud se habere ab eo, renuntiando exceptioni etc., ad penam dupli totius suprascripti pretii, de quo toto suprascripto pretio se bene quietum, contentum atque pacatum vocavit et dictum Meum inde absolvit et liberavit; et per stipulationem solennem dictus Aletius convenit et promisit suprascripto Meo quod de suprascripto mulo superius vendito vel eius proprietate aut eius possessione, occasione vel causa ipsum Meum vel eius heredes et bona sive cui etc. non imbrigabit vel molestabit neque per placitum vel ullo alio modo fatigabit set eis et cuique eo dictum mulum venditum, tam in proprietate quam in possessione defendet, disbrigabit et auctoriçabit ab omni imbriganti persona et loco, ubique locorum tam in appellatione quam in principali causa cum omnibus suis ipsius Alesii sumptibus et expensis, alioquin penam dupli totius / suprascripti pretii et omnes expensas etc., Pisis, 246v.
Florentie etc., obligando pro predictis omnibus et singulis se et suos heredes et bona ei etc., renuntiando omni iuri etc. et privilegio fori etc. cui suprascripto Alesio volenti et confitenti.

Ego Andreas iudex ordinarius atque notarius precepi per guarentigiam prout mihi licet per formam statuti Florentie et aliorum comunium loquentium de guarentigia quatenus dictum mulum defendat et disbriget et instrumentum obserbet etc.

Actum Pisis in ecclesia Sancti Sebastiani Kinthice, presentibus Dino Tuccii, hospitatore de cappella S. Cristine de Pisis et Fede Duccii de Brossi districtus Florentie, testibus ad hec rogatis. Dominice Anno Incarnationis MCCCXXXVIII, Indictione sexta, tertio Kalendas octubris.

II. (ASF., Not. Ant., A. 437, 246v. – 247)

Meus, vecturarius, quondam Fortis de Barberino suprascriptus vendidit et tradidit Alesio suprascripto mulum unum pili cerbonis vel quasi cum omni iure, actione, ratione et proprietate suis et cum omnibus et singulis soprossis, giardis, schinellis, morbis, macaneis et vitiis latentibus et manifestis, quos ipse mulus in se et super se habet vel habere posset, quos morbos, macaneas et vitia idem Meus asservit in ipso mulo esse, dicens et protestans se ratione vel occasione ipsorum morborum et vitiorum sive aliorum quorumcumque latentium vel apparentium ipsi emptori in aliquo de cetero nolle teneri; quem mulum idem Alesius interrogatus a suprascripto Meo confessus est in veritate se accepisse et apud se habuisse ab eo cum omnibus et singulis morbis, macaneis et vitiis, quos habet inter et extra, tam occultis quam apparentibus et pro tali qualis est, dicens, asserens et protestans se scire

dictum mulum sic esse morbosum, macaneatum atque vitiosum et ipsum venditorem occasione nolle sibi teneri occasione dictorum vitiorum seu morborum latentium sive apparentium, faciens ea finem et refutationem et pactum de uterius non petendo de omni iure et actione quod vel quam habet vel habere posset contra ipsum venditorem occasione ipsorum vitiorum seu morborum, renuntiando exceptioni dicti muli non habiti, nec accepti, quam exceptionem seu legem redhibitoriam, volens rem reddere et pretium sibi reddi, nec quanto minoris petens aliquam partem pretii sibi reddi, quam non dedisset, si scivisset rem vitiosam dictus Alesius per stipulationem solennem convenit et promisit dicto Meo non opponere vel opponi facere, nec pretium sibi retinere ad infrascriptam penam; insuper suprascriptus Meus vendidit et quasi tradidit, dedit, cessit etc. suprascripto Meo (*sic*) omnia iura et nomina omnesque actiones et rationes, tam utiles quam directas, reales, personales et mixtas et omnes alias que et quas ipse Meus habet et ei vel alteri persone pro eo aliquo modo vel iure seu occasione vel causa sive facto pertinent et competunt et pertinere et competere possunt in suprascripto et pro suprascripto mulo superius vendito et eius proprietate et possessione et eius occasione et causa, ut hiis omnibus et singulis dictus Alesius
247 et eius heredes et cui vel quibus etc.; / Inde possint agere, experiri et excipere et se et dictum mulum superius venditum tueri contra ipsum venditorem et eius heredes et bona et contra omnem aliam personam et locum pro pretio florenorum quadragintaquinque de auro bonorum et iusti ponderis de summa, cuius pretii dictus Meus interrogatus a suprascripto Alesio confessus est in veritate se accepisse et apud se habere ab eo florenos triginta de auro bonorum etc., renuntiando exceptioni etc. ad penam dupli florenorum tringinta de auro bonorum etc., de quibus florenis triginta de auro de summa dicti pretii se bene quietum, contentum atque pacatum vocavit, et dictum Alesium etc. relinquos vero florenos quindecim de auro residuos dicti pretii dictus Alesius per stipulationem solennem convenit et promisit suprascripto Meo dare et solvere ei etc. in florenis de auro tantum etc. hinc ad unum mensem proxime venturum, alioquin penam dupli florenorum quindecim de auro et omnes expensas etc. Pisis, Florentie etc., obligando pro dictis se etc., ei etc., dans ei plenam bailiam etc. salvo semper et reservato suprascripto Meo dominio etc., et quod a dicto termino in antea liceat suprascripto Meo venditori suprascriptum Alesium emptorem capi et detineri facere personaliter pro predictis etc. Et statuerunt inter se ex pacto quod solutio etc., renuntiando omni iure etc. et privilegio fori etc. et beneficio legum redhibitorie quanto minoris. Qui suprascripto Alesio emptori volenti et confitenti ego Andreas iudex ordinarius et notarius precepi per guarentigiam prout mihi licet per formam statuti comunis Florentie et aliorum comunium loquentium de guarentigia quartenus etc. Et per stipulationem solennem dictus Meus convenit et promisit suprascripto Alesio quod de suprascripto mulo superius vendito vel eius proprietate aut eius possessione, occasione vel causa, ipsum Alesium vel eius heredes et bona sive cui vel quibus etc. non imbrigavit vel molestabit neque per placitum vel ullo alio modo fatigabit, set eis et cuique eorum dictum mulum venditum tam in proprietate quam in possessione defendet, disbrigabit et auctoriçabit ab omni imbriganti persona et loco ubique locorum, tam in appellatione quam in principali causa cum omnibus ipsius Mei sumptibus et expensis, alioquin penam dupli totius suprascrpti pretii et omnes expensas etc. Pisis, Florentie etc., obligando pro predictis omnibus et stingulis se etc. ei etc., renuntiando omni iuri etc. et privilegio fori etc., cui suprascripto Meo venditori volenti et confitenti ego Andreas, iudex ordinarius atque notarius precepi per guarentigiam prout mihi licet per formam statuti comunis Florentie et aliorum comunium loquentium de guarentigia quatenus dictum mulum defendat et disbriget et instrumentum observet etc.

Actum in suprascripto loco, presentibus suprascriptis testibus suprascripto die.

Cassa est suprascrpta in florenis quindecim de auro restantibus solvendi de summa suprascripti pretii parabola suprascripti Mei venditoris data mihi Andree notario suprascripto, Pisis in apotheca campanilis ecclesie Sancte Cristine, presentibus presbitero Colo Ciani de cappella Sancte Cristine et Dino Tuccii hospitatore de suprascripta cappella, testibus ad hec rogatis, suprascriptis anno et Indictione, Nonis dicembris.

III. (ASF., Not. Ant., A. 437, 284v.)

Lorensus, dictus Tosus de cappella S. Cristine de Pisis quondam Henrici existens in 284v.
presentia mea Andree notarii etc. ostendit mihi Andree notario suprascrpto quendam ronsinum corsum pili baifori vel quasi cum naribus scissis et cum aliquibus pilis albis in testa prostratum mortum existentem in stabulo domus Rainerii Primerani et habitationis suprascripti Lorensi posito in cappella S. Cristine, quem quidem ronsinum dictus Lorensus dicebat et asserebat esse Laurentii Solarii qui moratur prope pontem veterem de Florentia et hodie mortuum esse ex quadem ficta, quam dictus ronsinus habebat et habet super costatu subter sellam; et hec dixit vera esse sine aliqua nube mendacii, et dixit quod Guidarellus mariscalcus quondam Orlandi de cappella S. Cristine predicta ibide assistens a tredecim diebus continuis citra singula die ipsorum dierum curavit dictum ronsinum de dicta ficta, rogans me Andream notarium etc.

Actum Pisis in suprascripto stabulo, presentibus Petro Cantis et Dino Tigne de cappella S. Cristine, suprascriptis Anno et Indictione [MCCCXXXIX, Ind. 6], tertio nonas iunii.

Coram quibus testibus ad hec rogatis eisdem die et loco, incontinenti Guidarellus mariscalcus suprascriptus et Blasius Chelis mariscalcus de cappella S. Cristine, eorum sponte et ad petitionem suprascripti Lorensi, dicti Tosi et ad exquisitionem mei Andree iudicis ordinarii atque notarii tanquam persone publice iuraverunt ad Sanctam Dei Evangeliam corporaliter tactis scripturis, sub quo iuramento dixerunt predicta a suprascripto Lorenso exposita vera esse, quia ipse Guidarellus mariscalcus suprascriptis diebus tredecim singula die vidit suprascriptum ronsinum cum dicta fitta super costatu subter sellam et quod ipsum ronsinum de dicta ficta singula die curavit et medicavit et medicavit, et ipsum ronsinum vidit hodie vivum, quem videt nunc mortuum esse ex ficta predicta; et dictus Blasius vidit hodie dictum ronsinum vivum et languentem ex dicta ficta et nunc ex eadem ficta videt mortuum; et que audivit dici a pluribus et pluribus quod idem ronsinus hodie mortuus erat ex dicta fitta, et taliter etc.

IV. (ASF., Not. Ant., A. 437, 316v.)

Sandrus Dragonetti de Florentia, factor Gerii Gondi de Florentia, existens in pre- 316v.
sentia mea Andree notarii etc. iuravit ad Sanctam Dei Evangeliam corporaliter tactis scripturis quod ipse Sandrus et dictus Gerius, cuius est factor, sunt cives Florentini et in civitate Florentie onera realia et personalia ut alii cives Florentini et quod salme sex lane lavate, quas Angeluccius Petri de Civitate Castelli, vecturarius, super superius suis ipsius Petri bestiis hodie oneravit et defert a civitate Pisana ad Burgum Sancti Sepulcri, sunt suprascripti Gerii Gondi, et pro ipso Gerio Gondi a dicta civitate Pisana ad Burgum Sancti Sepulcri dictus Angeluccius super bestiis suis eas portat et non pro alia persona. Et taliter me Andream notarium instrumentum etc.

Actum Pisis in suprascripto loco [apotheca campanilis ecclesie S. Cristine], presentibus Henrico Sismundi et Gherardi Ghini, hospitatore, Pisanis civibus de cappella S. Cristina, testibus ad hec rogatis, suprascripto die [MCCCXL, Ind. 7, nono Kalendas may].

V. (ASF., Not. Ant., A. 437, 312v. – 313)

312v. Barthalus quondam Lapi de cappella S. Cristine per stipulationem solenem ex certa scientia et non per errorem convenit et promisit Augustino Donati de Florentia quod nucelle quas suprascriptus Augustinus fecit seu facit presentialiter onerari super piatta ser Ghelis de Cesano, cuius est patronus Berguccius Lonis et deferri faciet super dicta piacta per flumen Sarni ad portum Signe districtus Florentie alia aqua quam pluviali balneabuntur super dicta piatta tantum ab oneratione ipsarum super dicta piacta usque ad ipsarum exonerationem ipsarum avellonarum super dicta piacta usque ad ipsarum exonerationem fiendam in terra portus Signe predicte, quod esse deterioramentum seu dannum quod dictus Augustinus ex ipsa balneatione ipsarum nucellarum super ipsa piacta tantum ex quacumque aqua preter quam de pluvia, de cuius pluvie balneatione tantum, dictus Baltarus in nichilo teneatur eidem Augustino pateretur seu sustineret, emendabit, restituet et dabit id totum quo dicte nucelle ex prenominata balneatione deteriores erunt; et hec omnia
313 et singula faciet et observabit et fieri etc., alioquin penam dupli / totius eius de quo agoretur et omnes expensas etc. obligando pro predictis omnibus se etc. ei etc., renuntiando omni iuri etc. condictione sine causa et ex iniusta causa, doli mali in suprascripta actione etc.

Actim Pisis in apotheca campanilis ecclesie S. Cristine, presentibus Filippo Iohannis de Florentia et Simone Nicoli de Podio ad hec rogatis testibus, suprascriptis Anno et Indictione [MCCCXL, Ind. 7], tertio Nonas aprelis.

≪ RÉSUMÉ ≫

ALCUNI ATTI RELATIVI AL TRANSPORTO TERRESTRE ROGATI A PISA NEL TRECENTO

Koichiro SHIMIZU

L'odierno quartiere di S. Martino di Pisa si chiamava Chinzica nel Medioevo. Si tratta di una zona di nuovo insediamento che risale all'Undicesimo secolo. Chinzica per la sua posizione di testa di Pons Vetus (Ponte di Mezzo) sulla sponda meridionale dell'Arno e per la rete viaria che collegava Pisa con il suo contado e con Firenze, aveva una importanza molto rilevante dal punto di vista economico per tutto il Medioevo. Nel Trecento, proprio nella zona centrale di Chinzica, intorno alla chiesa di Santa Cristina rogava gli atti un notaio, chiamato ser Andrea di Pupo da Peccioli, di cui rimangono 6 registri negli Archivi di Pisa e di Firenze. Sono registri veramente preziosi, perché parlano delle molto intense attività commerciali, sia marinare che terrestri, e della presenza a Pisa di numerosi forestieri, mercanti, marinai e

artigiani, nella prima metà del Trecento. L'autore qui pubblica 5 atti di un suo registro (ASF, Not. Ant., A. 437) per metterne in rilievo le caratteristiche e cercare di fornire spunti per gli studi futuri.